

第13回 札内川技術検討会 議事概要

札内川技術検討会 委員名簿（敬称略、五十音順）

氏名	所属等
泉 典洋	北海道大学大学院 公共政策学連携研究部 教授
斎藤 新一郎	環境林づくり研究所 所長
中村 太士	北海道大学大学院 農学研究院 教授
藤巻 裕蔵	帯広畜産大学 名誉教授
村山 雅昭	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 水環境保全チーム上席研究員
柳川 久	帯広畜産大学 教授
矢部 浩規	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム上席研究員
渡邊 康玄	北見工業大学 教授
オブザーバー	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所

注) 第13回札内川技術検討会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、委員への資料配布と委員から事務局への意見連絡により行った。

【第13回検討会の議題】

- (1) 令和元年6月の中規模フラッシュ放流による河道内変化状況
- (2) 令和元年度動植物調査結果
- (3) 令和2年度札内川自然再生（礫河原再生）実施計画書（案）

【委員からの主な意見】

議題(3)「令和2年度札内川自然再生（礫河原再生）実施計画書（案）」に関する意見

- ・ 現行のフラッシュ放流のみでは、礫河原は維持できない。
- ・ 礫河原維持のためには、夏季や台風時に発生する中・大規模降雨による出水をうまく利用することが重要である。
- ・ フラッシュ放流開始後、年超過確率 1/20 規模及び既往最大規模の出水が発生しており、礫河原再生においてそのような出水の重要性を位置づけるべきである。
- ・ フラッシュ放流は、あくまでも砂礫堆の小規模攪乱に伴うケショウヤナギの発芽床造りと砂礫地への水分供給、網状流路の維持が目的であり、それだけでは礫河原は樹林化すると思われる。
- ・ ダムによる流量調節の影響は、融雪時のみに効いていると考えるのはおかしい。夏や秋の洪水にも効き、ヤナギ類以外の樹木の侵入と定着、成長にも影響を及ぼしていると考えの方が妥当である。

■今後の予定

- ・ 委員からの意見を踏まえ、実施計画書の見直しを行い、関連する調査、検討の準備を進めていく。令和2年度のフラッシュ放流については、融雪期の状況を踏まえて検討し、計画を立てた段階で改めて連絡する。

【お問い合わせ先】

札内川技術検討会事務局：北海道開発局 帯広開発建設部 治水課 札内川技術検討会担当まで
帯広市西5条南8丁目 TEL：0155-24-4105、FAX：0155-27-2377